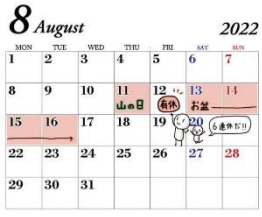
日本のお盆

お盆とはどういう意味ですか？

お盆というと、お盆休みを思い浮かべる人も多いでしょう。お盆休みがいつ頃なのかというと、8月13日～16日ぐらいが一般的です。
しかし本来のお盆は、先祖の精霊をお迎えして供養する期間のことを指します。
お盆の時期には先祖が浄土から地上に戻ってくると考えられています。
ご先祖様を1年に1回、家にお迎えしともにひと時を過ごして、ご冥福をお祈りし、先祖の霊を供養します。

お盆はいつ？



お盆がいつなのか、地域によってお盆の期間は異なりますが、旧暦と新暦によって7月15日前後か8月15日前後に大きく分かれます。
東京などの関東では、7月15日を中心にお盆をおこなうことが多いのですが、全国的にもっとも多いのは、8月13日から4日間の期間を指すものであるといわれています。

お盆の時に最低限覚えておきたいマナー（５つ）

お盆のマナー①：迎え火をしてお迎えする

迎え火って？

「迎え火」は、ご先祖様が迷わずにおうちにたどり着けるための目印になるもの。一般的には13日の夕方に迎え火をして、お迎えをする。家の門や玄関先に焙烙(ほうろく)と呼ばれるお皿を置き、おがら(麻の茎)を入れ、火をつけて焚き、煙を天へ上らせる。地域によっては白樺の皮を使うところもあるし、焙烙の代わりに耐熱皿を使っても OK だ。

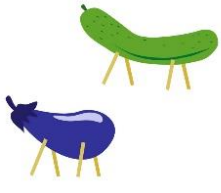
迎え火を焚いている時は、ご先祖様をお迎えする気持ちで合掌しよう。集合住宅などではベランダで行う場合もあるが、難しい場合には代わりに盆提灯をつるすだけでも大丈夫だ。

お盆のマナー②：お墓・仏壇の掃除をする

気持ちよくご先祖様を迎えよう！

お盆は、お墓や仏壇をきれいに掃除するいい機会である。自宅に友人など来客を招く時と同じように、ご先祖様を迎える場所をきれいに掃除して整頓するのは当たり前のことだ。お墓には雑巾持参で行き、水をかけながら墓石についた汚れを落とす。仏壇はホコリを落とし、きれいな雑巾で乾拭きするといい。

お墓の掃除が終わったら供花や故人の好きだったものをお供えし、お線香を焚いて合掌しよう。お墓掃除の際は、真夏の暑い時期でもあるため、必ずしも真黒なフォーマルである必要はないが、華美な服装は避けるのがマナーだ。靴も歩きやすいものを選ぶといいだろう。



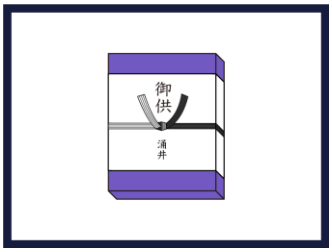
仏壇にはきゅうりで作る馬・なすで作る牛を一組、飾る家庭が多い。こちらに来る際は颯爽と走る馬に乗って、浄土へお戻りになる時はゆったりした

足取りの牛に乗って、という思いが込められている。

お盆のマナー③：お供えものには、白い掛紙をかける

のし紙はNG！のしあわびは右上のイラストの黄色い部分！

仏壇には、基本的に「五供（ごくう）」と呼ばれるものと、野菜で作った馬や牛、そして故人の好きな食べ物や飲み物をお供えする。五供とは、香（線香）・花・灯（ロウソクや提灯）・浄水・飲食という5つの要素からなるお供えだ。



逆に、お盆参りで親類宅にお邪魔することもあるだろう。その際は、菓子折りや果物には「のし紙」をつけないのがマナーだ。のし紙とは、のし・水引・表書きなどを印刷し/た紙であり、贈り物にかける。お盆参りではその代わりに、真っ白い掛紙(かけし)をかけることを覚えておこう。のしは、もともと「のしあわび（薄く伸ばして乾燥させたアワビ）」のことであり、生物の殺生をイメージさせるため、お盆の供物には用いないのが常識だ。

お盆のマナー④：お金をお供えする場合は不祝儀袋に入れる

水引の色に注意！

初めて迎える初盆（ういぼん）では、お金をお供えすることもある。初盆では多くの人がお参りにやってきて、お供えものでいっぱいになり、ご遺族がてんてこ舞いになる可能性も。それを避けるべく、品物ではなくお金をお供えしたほうが喜ばれるケースもある。

その際には不祝儀を使い、表書きは「御仏（佛）前」「御供物料」などを用いる。水引は黒白が基本だが、地域によっては黄白の結び切りを使うこともある。

金額は、友人知人で3千円もしくは5千円程度が相場だ。初盆であれば、5千円から1万円ほど。気持ちを伝えるためのものなので、金額にこだわる必要はない。多すぎず少なすぎずの金額として、5千円がベストかもしれない。

お盆のマナー⑤：おがらを焚いてお見送りをする

お見送りは心を込めて！

送り火は、迎え火をした場所で行う。迎え火と同様に、おがらや白樺の皮を焚いて、ご先祖様の帰り道の道しるべとする。盆提灯の場合はそれを持ち出し、お見送りをしたあとに灯りを消そう。牛に乗ってゆっくりとご先祖様が帰っていくことを想い、迷わず浄土にいけるよう心を込めてお見送りしよう。